

楽器の扱いに 科学的な裏付けを

各自治体や文部科学省から出された学校向けの感染症予防ガイドラインでは、音楽の授業での歌唱活動やリコーダーなどの演奏について言及されています。しかし、リコーダーの演奏は本当にリスクがあるのか、何がどのように危険なのか、どうしたらそれを回避し、子どもたちが安全にリコーダーを吹けるか……私は横浜市小学校音楽教育研究会会長および全日本リコーダー教育研究会副会長という立場でもありますが、何より自分自身が「本当にリコーダーから飛沫が飛ぶのか」と疑問に思いました。そこで、リコーダー製造を手掛けるトヤマ楽器製造株式会社の皆さんと共に検証をし、その結果を基にしてこの度、市小音研から横浜市立学校などに向けて「感染防止のためのリコーダーの扱い方及び演奏の仕方」という情報提供・提案を行った次第です。

「リコーダー」と 「歌唱」活動は 本当に危険なのか

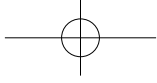
》 INTERVIEW 後藤俊哉 神奈川県横浜市立桜丘小学校校長

構成：小島綾野

結論から言えば、空調の専門企業の研究室でさまざまなリコーダーの吹き方を試し、演奏動画を撮影して飛沫の飛散を確認したところ、リコーダー演奏で飛沫が出ることはまずないということが確かめられました。ただし、リコーダーを吹く前に「トゥ」で歌ったり、（口とリコーダーの間に隙間が生じた状態で）過度に強いタンギングで吹いたりすると若干の飛沫が認められました。

また、リコーダー奏者の吉澤実先生にも助言を受けたところ、とても興味深いお話をいただきました。「息遣いを強くしすぎたり、タンギングを鋭くしすぎたりすると飛沫が出る可能性があるけれど、そのような吹き方をしなければ出ない。つまり、飛沫が出ないように吹くことが、結果的に演奏の質を高めることになる」ということ。飛沫感染を防ぐことを目的に、柔らかいタンギングを使い、口の中をたっぷり開けて優しい息で吹くことで、音色自体も滑らかなになるのです。

それから、楽器の取り扱いや手



全日本リコーダー
教育研究会の
ホームページ



<http://zenrikoken.com/>

子どもたちの 伝言方も大事

入れについてもトヤマ楽器と確認をしました。リコーダーは個人持ちの楽器ですし、感染予防の基本であるうがい・手洗いを徹底しておけば、自分のリコーダーを扱うことには何らリスクはない。ただ、子どもたちの実態を踏まえ、「楽器の貸し借りはしない」「リコーダーを振り回すなど水滴の飛ぶ行為はしない」「水抜きの際は必ず布をウインドウエイに当てて」などの基本的なポイントも改めて押さえ、他にも「タンギング唱はマスクを着けて行う」「演奏しないときは楽器を自分で持ち、他に触れないようにする」また念のため「友達との間隔を1メートル以上開ける」などの留意点を明記し、「感染防止のためのリコーダーの扱い方及び演奏の仕方」をまとめました。

検証実験の詳しい過程や結果はトヤマ楽器のウェブサイトで閲覧できますし、「感染防止のためのリコーダーの扱い方及び演奏の仕方」も全日本リコーダー教育研究会のウェブサイトで公開しています。本誌読者の皆さんにも、ぜひお役立ただけたらと思います。

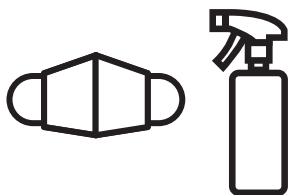
今は「withコロナ」での生活の仕方や授業の在り方が求められている状況ですが、それはつまりどういうことかといえば、過度に恐れることなく、「こうすれば大丈夫」という根拠のある情報を持って判断し、できることをやってくるといえることですね。そもそも感染予防のために一番大切なのは「自分がうつらないために手洗いうがい」「人にうつさないためにマスク」そのゆえんをきちんと理解し、しっかり徹底していれば、「マスクに穴をあけてリコーダーを吹くべきか」「子どもの机についたて

を置かなくてはいけないのでは」などといった過度な対応は必要でしよう。もしそうするとすれば、現場にはその管理（ついていたての消毒など）という仕事も増えてしまわうわけです。

また、「withコロナ」の時代だからこそ、子どもたち自身が「何のためにそうするのか」を理解できるように指導することも大事ですね。リコーダーを演奏するときには、もちろんマスクを外すことになりませんが、「ということは、もし自分がウイルスを持つていたら、それを人にうつす可能性がでさるってことだから、その状態でおしゃべりをするのは危ないし、自分が吹いた楽器はきちんとしまわなきゃいけないよ」と子ども自身が実感すれば、ルールを守ったり、より安全な方法でリコーダーを扱おうとしたりすることに主体的になる。「こうしなさい、あーしなさい」という一方的な指示だけでは制限ばかりになり、子どもの意欲は高まりません。「こうしてしまおうと危ないけど、こういうふうにすればできるよ」という伝え

方は、「withコロナ」においても重要だと思えます。

注意をするときも、「タンギングを強くやると『トゥトゥトゥ』と破裂する音が出るんだけど、そうなるも飛沫が飛ぶ可能性があるから、もっと優しい息で吹こうね」と順を追って伝えれば、子どももその必要性をすぐ理解してそのように吹くでしょう。「こう吹いてはいけません」「これはダメ、あれはダメ」という言い回しでは子どもが学べることは何もありませんが、子どもたち自身が考え・実感できる伝え方で指導することは、「withコロナ」の時代を生きていく子どもたちにとって大切な学びにもなるでしょう。





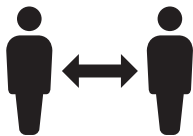
また、吉澤先生は日頃から「息と
いうのは『自分の心』と書くんだよ」
と仰っています。だから、呼吸や
息遣いは心の在りようとながっ
ているし、本校では休校明けに分
散登校が始まった折、緊張や不安
もある子どもたちに「心を落ち着
かせるために（マスクをしたまま）
深呼吸しよう」とも呼び掛けまし
た。そうやって「これは自分の心
なんだ」と考えながら息遣いを意
識することは、心の安定にも結び
付き、歌唱やリコーダーの演奏
にもすごく関わってくると考えて
います。

「レベル3地域」 「レベル2地域」 「実施について慎重に検討」などと されています。

各自治体や文部科学省の感染症
予防ガイドラインをざっと読むと、
どうしても「歌はダメ、リコーダー
はダメ」と言われているような印
象を受けるし、日頃の子どもたち
の吹き方を思い浮かべると「飛沫
が飛んでそう」というイメージに

なるのも分かりますが、実験結果
に基づき、「リコーダー演奏で飛沫
は飛ばない」ということを科学的
に理解した上でガイドラインを丁
寧に読んでいくと、「できること」
というのも見えてくるんです。

例えば、5月22日に文部科学省
から出された「学校における新型
コロナウイルス感染症に関する衛
生管理マニュアル」では、「感染症
対策を講じてもおお感染のリスク
が高い学習活動」として「室内で
児童生徒が近距離で行う合唱及び
リコーダーや鍵盤ハーモニカ等の
管楽器演奏」が示されました。そ
の上で、感染症の状況により「レ
ベル3地域」ではこのような活動
を行わない、「レベル2地域」では
「実施について慎重に検討」などと
されています。つまり、これらの



リスクを十分に検討し、回避でき
るのであれば（例えば「近距離」
にならないように手立てをとるな
ど）、このような活動も可能だし、
子どもたちの演奏の場を確保する
ことはできるということです。

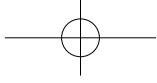
横浜市教育委員会による「6月
1日以降の段階的な学校教育活動
開始に向けた準備について」とい
う通知（5月19日）においても、「当
面はリコーダーや鍵盤ハーモニカ
等、呼吸を使う楽器を使用しない
こととする。演奏が可能になった
際は、呼吸を使うものであること
を踏まえて、間隔を十分にとる等
の配慮をする」とありました。つ
まり、そのときの状況などを適切
に鑑み、十分な配慮をすれば演奏
は可能だということです。また、
横浜市では「マスクを着けて歌う
ことは可能」ともされています。

今はマスクをすること自体が重要
視されていたり、発声すること自
体が恐れられたりしているような
傾向もあります。子どもたちに
「今後一切声を出すな」と指導する
わけにはいかないのですから、「な
ら、飛沫を飛ばさないように声を

出すのは大丈夫」というふうに捉
え方を変えるべきだと思われ、「マ
スクを着けてでも」歌えるのなら
子どもたちにはやっぱり歌わせた
い」と考えました。

また、日本小児科学会もウェブ
サイトで、子どもたちの間での感
染や重症化の可能性は極めて低い
という医学的知見を発表していま
す（5月20日）「小児の新型コロナ
ウイルス感染症に関する医学的知
見の現状」。そのような情報も総
合的に判断し、先に挙げたような
感染予防の根本的なポイントを徹
底しながら活動すれば、リコーダー
演奏はできるという結論になるで
しょう。

とはいえ、市小音研などの立場
からできることはあくまで「情報
提供」。それらの情報を判断し、「う
ちの学校ではこうする」と決める
のは各校の校長先生。当然なが
ら、感染の状況や学校の規模など
によっても判断は変わるでしょう。
横浜では、全市340校の校長宛
てに市小音研会長としてメールを
送信し、「このような検証データお
よび提案を出しましたのでご活用



「ただできれば幸いです」とお伝えしました。確たるデータがあったことは、やはり校長先生たちにとっても大きな安心材料になったようです。もしそれがなかったら「音楽は危険そうなのでしばらくやりません」と早々に決断した校長先生もいたかもしれません。

「リコーダー」の意味を改めて考える

まして音楽というのは、この世界的な困難の中で子どもたちの不安や辛い思いを、少しでも楽にしてあげられるものの一つでもあるはずだと思う。現在（6月中旬）の本校ではマスクを着けた上で歌っていますし、音楽の授業では先生の太鼓に合わせてみんなで手を拍子を打つ活動などを行っています。そんな場面を見ると、子どもたちの表情はやっぱり明るくなっているんです。歌唱活動について「範唱音源をかけて、心の中で歌う」という指導を提案されて

いるところもあると聞きましたが、やっぱり「みんなで歌う」とことや、自分と友達の声が合わさっている響き、「みんなで一つの音楽をやっている」という実感こそが、子どもたちにとって「みんな一緒だよ」という安心感になるのだと思う。東日本大震災のときも「みんな声を合わせて歌ったことで勇気づけられた」という話がたくさんありましたが、非常事態で心細くなったり、心がつながったことを感じられるのだと思うんです（各々が心の中で歌う）では、そのような目的はやはり果たせませんよね。だから、子どもたちにはぜひ「一緒に歌う」場をつくってあげたいし、「それを実現するために、私たち教員は何をしたらいいのか」と考えると、まず今回の感染症について正しく知ること、そして「その上でリスクを回避するにはどうするか」「どうしたら一緒に歌う活動ができるようになるか」を立案し実行することが、私たちの責任なのだと思っています。

私がリコーダーの活動を止める

べきではないと考えるのも、子どもの表現の手段の一つでも多く確保したいという思いがあるからです。「管楽器がダメなら、木琴でも用意すればいいじゃないか」ということではなく、まして「リコーダーが上手に吹けるようになることもありません。子どもたちには多様な楽器に出逢い、演奏する楽しさを感じながら、その音をみんなと合わせ、みんなで一つの音楽をやるという喜びをできる限り経験してほしいし、それこそが子どもにとつての大きな学びになると私は考えています。

「これはダメ、あれはダメ」とばかり考えていると、音楽の活動がねらいと外れた方向に行ってしまう危険もあると思う。例えば、リスクを回避することばかりを考えて「子どもたちがただ音源を聴いて、感想を書いて終わり」という授業になっては、音楽科が本来目指している学びも全く達成できず、本末転倒になってしまいますよね。それに、「この活動はやらない」と、あっさり決めるのはとても簡単な

んです。だけどそうして一旦切ってしまったら、「じゃあ、復活させるときは何が基準になるの？」という、答えの非常に難しい話になってしまわないですか。私たちは「withコロナ」と言われる世界で、そのリスクと共に生きていかざるを得ないので、子どもたちが「どうしたら共に生きられるか」を考えることこそが、今を生きる私たちの仕事なのだと思います。